いの流水俳壇

間　浩太選

「当季雑詠」

懐かしのニキビの恋の椎若葉
竹崎たかひろ

（評）少年のころか又は青年のときの、ニキビが多く顔に出たころの恋（初恋か？）を思い出として懐かしく胸に秘めていると思われます句です。

椎の若葉は、古葉が濃緑ですので椎若葉の明るい色の、黄色より黄金の色が、もくもく盛り上がり、山全体が、一段と大きくなった感じがします。この椎若葉が、もくもくと山腹に出ている情景は、ニキビの顔に出ている様（さま）が連想できるのではないでしょうか。

「ニキビの恋」は面白いです。

削ぎ牛蒡酢水に晒す夏初め
井上　郁子

（評）牛蒡は一般には、春四月に種を蒔き秋から冬に収穫するのと、秋に種を蒔き翌年の初夏に収穫する。

この句は初夏に料理しているので、去年の秋に種を蒔き初夏に収穫したものを料理したと察せられます。

料理は、この句のように削いであくを抜くため水や酢に晒しますが、香りや、うまみ、栄養分は皮のすぐ下にあるため、あく抜きのしすぎに注意。皮はむかずに、薄く削ぎ落とすのみとのことです。

料理の上手な作者の料理。おいしそうですね。

代田まで散歩の足のついのびる
田蔦恵美子

（評）田植え前水を入れた田の面を掻きならし、肥料を土中にまぜて苗を植える直前の田が代田ですが、田園の近くに住んでいる者には、代田が珍しくなく早苗の緑もありませんので、代田を見に行く気も、出ないのでは。

しかし、この句の作者は、市街地の中に住んでいるので、にぎやかなところの散歩が多いと考えられます。ときには静かな代田まで足を伸ばされることがあるのでしょう。

喧騒な市街地を離れて静かな代田まで散歩の足を伸ばされる気持ちが分かります。

もう少し日が経てば、緑の早稲田となり、蛍も飛ぶようになるのではと思います。

新緑の中にストレス放ちけり
小野川町子

（評）初夏の若葉のさわやかな緑を新緑という。

また、初夏の木々の緑、甦ったような木々の葉の艶やかな色、吹く風も最も心地よいのが新緑の候であります。

この句の作者は、新緑が好きであり、新緑の木を見ると心を和ませるような雰囲気や効果があるのを感じているのでしょう。

誰でも大小はあっても、悩みや心配事、腹の立つことなどあり、ストレスを持っていると思います。

この句の作者のように、ストレスや嫌なことあれば、新緑の木々を見るのも一つの方法と思います。

振り返り去りゆく故郷風五月　大川　節弥
今植ゑし早苗を支ふ水の嵩　刈谷　志津
川底に流す土佐和紙の鯉のぼり　植田　紀子
里の百戸一戸に泳ぐ鯉のぼり　友草　水月
母よりも一歩先を行く入学児　岡本とも子
雑木の皆美しき新樹光　片岡　包女
忠魂の墓誌拾ひ読む新樹下　竹崎　光子
仁淀川きらめく姿鯉のぼり　森岡　照月
いずみのの彼岸桜や友いかに　筒井　正子
夕映えの瓢箪池や散る桜　津田　久美
行き行きて若葉の奥も若葉かな　伊藤　萩甫
お土産と色よき赤の夏落葉　弘瀬うき子
乳飲み子は母の分身聖五月　松尾満津於
花びらを水の流れに乗せる風　間　浩太

次　題　「当季雑詠」五句
締め切り　毎月五日

投句先
社会教育課
いの町3597
☎893―2012

今月のこども川柳

風ふけば　桜まいちる　なみき道
川内小6年　野口　朱莉

（評）五七五のリズムもしっかりしている。その上に無理のない表現と物の見方、とてもいいですね。ずっとずっと続けてほしいですね。

まんげつよ　パパとふたりで　おつきみだ
伊野小2年　しおた　ふうか

（評）パパとふたりのおつきみ、うれしいですね。お月さまもにこにこ、パパと子どもの姿がうかんできます。

たのしいひ　それはやっぱり　天気のひ
川内小2年　ちだ　みそら

六年生　ならんで歩く　帰り道
川内小6年　野口　朱莉

たんぽぽの　わた毛が土に　たねうえた
川内小3年　髙橋　奈甫

家族では　あいじょういっぱい　あたたかい
伊野小5年　杉本　愛華

アナウンサー　私のゆめは　それだけだ
同

あいさつは　気持ちが良くなる　おまじない
川内小6年　大久保朋美

としょしつは　ほんがいっぱい　たのしいな
伊野小2年　中じま　さよ

春とうらい　いっしょに花粉も　とうらいし
川内小5年　手塚　涼太

べんとうで　桜をぜんぜん　見てません
長沢小6年　曽我部真雪

※「こども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。次回提出締め切りは7月20日（金）です。たくさんの皆さんの応募をお待ちしています。（応募は各小学校を通じてお願いします。）

※選評は、川柳漣会の皆さんにお願いしています。